

〈小特集 2〉戦後京都と教育・文化運動Ⅱ ― 京都人文学園・京都勤労者学園を中心に ―

は じ め に

奥 村 旅 人*

本小特集は、2024年に刊行された小特集「戦後京都と教育・文化運動 ― 京都人文学園を中心に ―」（『人文学報』第122号）の続編にあたる。前小特集に引き続き、京都人文学園及び京都勤労者学園に関する論考と資料目録、翻刻資料から構成されている。

京都人文学園とは、1946年に創設された3年制の各種学校である。1930年代に『世界文化』の同人として論陣を張った新村猛（1905-1992）や久野収（1910-1999）を中心として、当時京都に在住していた知識人たちが講義を行った。新学制の整備に伴って学生が減少したため、1949年から1950年にかけて夜間制に移行、1957年には京都勤労者教育協会との合併によって京都勤労者学園へと改組し、現在に至っている。

別稿（『教育』と『社会運動』の隙間、あるいは接合点：研究対象としての京都人文学園）『人文』（72）、2025年、37-39頁）でも述べたが、京都人文学園や京都勤労者学園は各種学校というその制度的位置づけによって、学校教育史研究と社会教育史研究の狭間に置かれている。初等教育から高等教育に至る「正規の」教育システム、いわゆる「一条校」ではないために、学校教育史研究で主題的に取り上げられることはほとんどない。また社会教育行政が管轄する教育活動を主な研究対象としてきた社会教育研究の側からみれば、各種学校はあくまでも「学校」であるために、取り上げられることは稀である。本共同研究は、それなりの認知度を得つつも主題的に取り上げられることが少なかった京都人文学園について、同時期の社会運動史の文脈も視野に入れつつ、その教育活動の様相を明らかにしようとするものである。

京都人文学園に関する本共同研究は、京都勤労者学園が所蔵する京都人文学園関係資料の存在を、福家崇洋氏が知ったことに端を発している（詳しくは前小特集所収の福家崇洋「はじめに」参照）。福家氏が須永哲思氏と山本捷馬氏（琥珀書房）、そして筆者に声をかけられ、共同研究が形作られていった。前小特集には、藤野志織氏（京都大学人文科学研究所）にも加わって頂いた。

* おくむら たかひと 京都大学大学院教育学研究科

本小特集が編纂されるまでの経緯を記す前に、前小特集との関係をわかりやすくするために、前小特集の目次を掲載しておきたい。

はじめに（福家）

○論文篇

京都人文学園の形成と変容

—— 知識人・労働者による教育空間と社会運動の関係史 ——（奥村）

私立各種学校・京都人文学園の歴史

—— 「人文主義の精神に依る教育」のゆくえ ——（須永）

新村猛と『世界文化』

—— 1930年代京都のフランス的文脈を踏まえて ——（藤野）

戦後歴史学の明暗

—— 渡部徹と社会・労働運動史研究 ——（福家）

○資料篇

資料目録

I 京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録（奥村・須永・福家）

II 吉田九洲穂旧蔵京都人文学園関係資料目録（須永）

III 新村猛関係資料目録（奥村・須永・福家・藤野）

IV 京都地方労働組合総評議会（京都総評）関係資料目録（福家）

翻刻資料

I 新村猛「民主戦線の諸問題」（藤野）

II 講義ノート「一般教養（新村猛先生）（6.10ノ趣意書ニ依ル）」（須永）

III 簿冊「昭和二十一年度 審査合格者作文 京都人文学園」（須永）

IV 「12月1日 講師会議記録」（簿冊「京都勤労者学園の創立 人文学園，勤労協資料（渡部徹氏保存分）」内）（奥村）

V 新村猛「佐々木時雄弔辞」（福家）

VI 「人文学園創立30周年の集い」（奥村）

前小特集では、京都勤労者学園所蔵資料のうち京都人文学園関係資料に焦点を当て、目録を作成したうえで、その資料を用いた論文と資料の翻刻を掲載した。前小特集刊行後、福家氏・須永氏と筆者は、京都勤労者学園が所蔵する他の資料の整理を進めてきた。同学園では「倉庫」と「学生室」に資料を保管しているが、前小特集で扱った京都人文学園関係資料は「倉庫」にある十数の棚のうち一つを占めるに過ぎず、「倉庫」や「学生室」には他にも京都勤労

者学園関係資料が大量に存在していた。本小特集に向けて残りの資料の整理を進め、1974年（京都勤労者学園が現在の場所に移転する年）以前の資料について目録を作成した（資料篇 資料目録Ⅰ「京都勤労者学園関係資料目録（京都勤労者学園所蔵）」）。この資料群には、京都勤労者学園に関する基礎資料が数多く含まれている。また、その他にも京都人文学園・京都勤労者学園において学生がつくったサークル紙も数多く残存しているなど、京都人文学園から京都勤労者学園に至る流れのみならず、当該時期の京都における教育・文化運動について知るにあたっても重要な資料群だと言えるだろう。

京都勤労者学園所蔵資料の整理と並行して、前小特集に掲載された重山文庫所蔵新村猛関係資料についても、引き続き整理と目録作成を進めてきた。その成果が「新村猛関係資料目録Ⅱ（重山文庫所蔵）」（資料篇 資料目録Ⅱ）である。新村猛関係資料の中には、新村猛が京都人文学園で行ったと考えられる講義のノートがある。京都人文学園における講義の具体的な内容については不明な点が多いため、このノートは極めて貴重である。また、新村が学園創立の理念とした「人文主義」の内実を推し量る上でも重要な資料であると位置づけられる。本小特集には、ノートの全文を翻刻して掲載した（「新村猛講義ノート」（資料篇 翻刻資料Ⅲ））。

この間、京都人文学園と京都勤労者学園で主事を務められた杉本喜代巳氏のご自宅にも伺った。杉本氏は両学園の様子についてお話しくださり、また所有されている資料や写真もお見せくださった。その際の杉本氏のお話を文字起こししたものを、2021年12月24日に福家・須永両氏が実施されたインタビュー記録と合わせて資料として本小特集に掲載した（資料篇 翻刻資料Ⅰ「杉本喜代巳氏インタビュー（全3回）」）。拝見した資料の中でも、1947年から1948年にかけて学生が記した「日誌」は、当時の学生たちの考えを知るうえで極めて貴重な資料であると考え、本小特集に全文を翻刻した（資料篇 翻刻資料Ⅱ「生徒委員日誌 1947.6.3～1948.4.22（2回生記）」）。

以上の各資料群を各自の専門領域に引きつけて執筆したのが、論文篇の各論文である。冒頭で少し触れたが、京都人文学園はかつての『世界文化』（1935年創刊）同人を一つの中心として1946年に設立され、その後1949-1950年の夜間制移行・1957年の京都勤労者協会との合併という二つの組織改編を経て京都勤労者学園へと継承された。以下、この時系列に沿って各論文の内容について簡単に述べておこう。

福家論文が扱っているのは、『世界文化』同人たちの戦前期である。より具体的には、新村猛の令息である新村恭氏所蔵の「新村猛旧蔵裁判関係資料」を用いて、文化運動としての『世界文化』を、共産主義運動との関係で再定位している。

須永論文が焦点を当てるのは、一つ目の組織改編すなわち昼間制から夜間制への移行期である。京都人文学園における学生自治や同窓会組織に着目して、昼間部から夜間部への移行に伴う学園の変容を検討している。

拙稿では、二つ目の組織改編である京都勤労者学園への改組を扱っている。各種学校である京都人文学園と、労働組合の教育組織である京都勤労者教育協会という目的の異なる団体がいかにして合併するに至ったのかを、京都勤労者学園所蔵資料を用いて検討した。

以上の論文と目録・翻刻資料が、京都人文学園・京都勤労者学園研究を、あるいはそれにとどまらず、当該時期の教育・文化運動や各種学校、労働者教育に関する研究を活発にするきっかけとなれば、望外の喜びである。

最後に、本小特集刊行までに資料調査にご協力いただいた京都勤労者学園の皆様、新村恭氏に心より感謝申し上げます。また、課題公募班（萌芽研究）「社会運動と社会教育の関係史 —— 1930-40 年代の京阪地域に焦点を当てて ——」として本研究を助成いただいた京都大学人文科学研究所にも御礼申し上げたい。そして、資料調査やインタビューに何度もご協力いただいた杉本喜代巳氏に感謝申し上げます。本小特集の原稿を執筆している最中、思いがけず杉本氏の訃報に接した。京都人文学園と京都勤労者学園に長らく関わってこられ、誰よりも両学園を知っておられる杉本氏のご協力がなければ、この共同研究は成り立たなかったかもしれない。それだけに、杉本氏には本小特集をお読みいただきたかった。今となっては間に合わなかったことを悔いるほかない。ご冥福をお祈り申し上げます。